牧畜民の定着化過程における「ホト」の形成と居住形態の変化

中国内モンゴル自治区シリントグ盟镶黄旗の「ホト」を事例として

FORMATION OF "HOT" AND CHANGES IN THE RESIDENCE STATUS WITH THE SETTLING DOWN PROCESS OF PASTORALISTS

Examining the case of "Hot" in Xilingol league bordered yellow banner of inner Mongolia, China

野村理恵*, 中山 徹**, 今井範子***, 姫 茹****, 咏 梅*

*Rie NOMURA, Toru NAKAYAMA, Noriko IMAI,
Yaru and Yongmei*

This study analyzed the formation processes of the small community "Hot" and the changes in residence status of the pastoralists in "Hot" and identified the current status of the settling of these pastoralists and the processes thereof. 1) With the establishment of the people's commune in 1958, "Hot" as the pastoral residential groups for nomads was organized and stabilized. 2) In the land being studied, with only a narrow land area and a small number of livestock, it appears that the ranching style, where collective houses and lands are jointly used in each "Hot" was established to effectively manage the division of lands and livestock. 3) Space compositions for "Hot" are based on the configuration that existed when they were nomads. With crowded buildings or influences of government policies, visible borders which separate livestock or the boundaries of each household, appeared. 4) Space concepts for traditional yurt are used in the space composition for the stabilized residences. The space concepts are affected by the settling down process, the Han people and urban residences. New and old space concepts co-exist.

Keywords : *The Small Community, Pastoralists, Residence Status, Inner Mongolia, China*

小集落, 牧畜民, 居住形態, 内モンゴル, 中国

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

ホト *xota* ^{注1)} とは, モンゴル語で世帯 (アイル *ail*) がいくつか集まって形成される宿营地集団のことを指す^{注2)}。家庭や家畜の休憩場所という意味もあり, 宿营地そのものを指すときにも使われる。但し, モンゴル族の遊牧社会においては, いずれの意味でも固定的なものではなく, 構成員を血縁関係に限らず, また季節ごとに数も場所も異なる流動的な集団であった²⁾³⁾。

中国・内モンゴル自治区では, その広大な草原においてかつて牧畜民が遊牧生活を営んでいたが, 現在は定着化が進んでいる。特に1982年以降, 生産責任制が実施され, 家畜の私有化と, 土地の分配が始まった。土地は世帯単位にその使用权と管理権が分配されたため, 各世帯の土地を柵で囲うことが一般的となり, 宿营地移動や宿营地集団の形成といった伝統的な牧畜業の形態が急速に姿を消している。このような現象は内モンゴル自治区全体で進行しているが, その定着化要因や過程, 進度は地域によって様ではない。

現在, モンゴル族の牧畜民が多くを占める草原地帯において, 比較的早くから宿营地集団が定着し, 概ね7〜8世帯程度から成る小集落が散在している地域がある。この小集落のこともホトと呼ぶ (漢

語では自然村と表記されることもある)。

本稿では, 定着化の一事例として, 小集落ホトの形成過程及びホトにおける牧畜民の居住形態の変化を分析し, 定着化の実態やその過程を明らかにすることを目的とする。

1-2. 研究の意義と研究方法

ホトに関する記述をしているものは多数あるが^{注3)}, モンゴル族の伝統的な牧畜形態の説明として, あるいはホトが意味する空間概念や構成メンバーの関係などについて取り上げられている。また, モンゴル族の都市建築史を明らかにするなかで, 遊牧都市ホトの空間構成について述べているものがある⁷⁾。しかし小集落ホトに関する記述は少ない。生態人類学的視点より, 遊牧社会の変遷について明らかにするため, 小集落ホトの事例調査を行っている研究もある⁸⁾。但しこれは, 生計活動, 特に漢人との関係に着目したものである。また, モンゴル族牧畜民の定着化については, 土地政策や農耕化^{9〜11)}, 環境問題^{12〜14)}等に即して各方面で取り上げられている。モンゴル族の居住形態変化については, 移動住居であるゲル *ger* から固定家屋であるバイシン *baising* への移行が議論されているが, その移行過程にも地域差があり, 特に農耕化の影響を受けておらずモンゴル族が多数を占める牧畜地域での変化に関する研究が十分であるとはいえない。

* 奈良女子大学大学院人間文化研究科 博士後期課程

** 奈良女子大学大学院人間文化研究科 准教授・工博

*** 奈良女子大学大学院人間文化研究科 教授・工博

**** 奈良女子大学大学院人間文化研究科
特任助教・博士(学術)

Graduate Student, Graduate School of Humanities and Sciences, Nara Women's Univ.
Assoc. Prof., Graduate School of Humanities and Sciences, Nara Women's Univ., Dr. Eng.
Prof., Graduate School of Humanities and Sciences, Nara Women's Univ., Dr. Eng.
Assistant. Prof., Graduate School of Humanities and Sciences, Nara Women's Univ., Ph. D.

以上を踏まえ、本稿では、モンゴル族牧畜民が、集住生活をしながらも牧畜を続ける地域において、牧畜業の変遷及び居住形態の変化に着目する。

研究方法は、まず、ホトの形成と定着化過程を明らかにするため、当該地域での政策や牧畜業の変遷を整理する（第2章）。その後、ホトの空間構成（第3章）及び住居の変化（第4章）について事例を挙げ、居住形態の変化を分析する。最後に、政策、牧畜業の変遷、居住形態の変化等からホトの形成と定着化の相互関連性を分析し、まとめとする（第5章）。

1-3. 調査概要

調査地は内モンゴル自治区・シリントグ盟 *sili yin yool* 盟镶黄（フベートシャル *xōbegetü sir_a*）旗・バヤンタラ *bayan tal_a* 鎮・スージンゴル *següji yin yool* ガチャ^{注4}である（図1）。

镶黄旗はシリントグ盟の南部に位置し、総面積4960 km²、そのうち利用可能な草地は4400 km²である。人口は27,300人で、モンゴル族が63%を超え、牧畜民の占める割合は55.2%である。モンゴル族による牧畜の盛んな地域であると同時に、人口密度が高い行政区でもある。1つのソムと2つの鎮、60のガチャと480のホトが存在する。小集落ホトが多数存在する地域として調査地に選定した。

調査はスージンゴルガチャに位置する1つのホト（ホトA：ホイトスージ）を中心に、そのホトを形成する11世帯、及び近隣の3つのホト（1～2.5km圏内）について観察、聞き取り及び実測調査を実施した（図2）。特にホトAのホト長であるU家には重点的に聞き取りを行っている。本稿では調査地と表記する場合、この4つのホトが存在する地域を指す。

2007年2月15～22日の第一次調査では、ホトAについて、世帯数や牧畜業の様子、ホト形成について聞き取り、ホトの配置図を実測した。同年7月4～7日には第二次調査で、近隣3ホトについても各ホトの規模や形成過程、牧畜業の変遷について聞き取り調査を実施した。第3次調査は、2008年7月17～19日で、聞き取り項目（ホトの世帯数、家畜数、住居建築年数等）の補足をし、2009年6月の第4次調査では、ホトAの全住居の実測調査及びホト配置図の補足調査を行った^{注5}。

図1 調査地位置図

図2 調査地航空写真

* Google earth2009より

2. ホトの形成と牧畜業の変遷

2-1. 宿营地集団としてのホト

1950年代、調査地には概ね2～3世帯からなるホトが、1年に2回移動を伴う宿营地集団として機能していた。夏・秋（8月～10月）の宿营地から、冬・春（11月～7月）の宿营地までは、年によって異なるが、概ね2.5～3.5kmで、主に牧草の種類と成長をみて移動

していたが、夏には水源の近く、冬には風を避けるため山の近くを選んでいた。当時は各世帯が移動住居であるゲルに居住し、共同で家畜を守っていた。夏营地では、20～30m間隔でゲルを一行に並べ、また家畜も密集しないように放しておく（図3）。狼等の外敵から家畜を守るため、まわりには30cm程度の穴を掘り、アルガル *aryal* と呼ばれる乾燥した牛の糞を燃やす。一方冬营地では、寒さに対応するため家畜を密集させる。その家畜を取り囲むようにゲルを円形に配置していた。このとき、ゲルの間隔は夏营地よりも狭く、10～15mほどであった。この宿营地集団は、家畜の出産期や毛刈り等の繁忙期、あるいは家畜の数や各世帯の状況に応じて毎年再編成されるものであった。

* スケールや方位等は聞き取りからの再現であるため誤差がある。また、家畜囲いの大きさ、糞を燃やす範囲や場所は、家畜の数や風向きによっても異なる。

図3 宿营地（ホト）のイメージ図（聞き取り内容より作成）

2-2. ホトの組織化と分離

1958年、人民公社^{注6}設立とともに家畜はすべて国家のものとなり、生産隊単位^{注7}での管理体制ができた。また、家畜の種類ごとに放牧人（マルチン *malčin*）が指定され、宿营地の番をする管理人（マナーチン *manayačīn*）も指定された。これは主に男性の仕事となったため、女性や子ども、年配の牧畜民は冬营地に残り、マルチンとマナーチンが家畜を連れて移動した。移動先の宿营地までの距離は家畜によって異なり、馬群を任されていたU家では200kmほど離れたアバガ旗までいくこともあった。それまで世帯単位で行っていた季節移動であるが、世帯の一部が定着化し、生産隊単位での移動放牧へと変化したのである。

人民公社設立に伴い、2人の漢族（河北省及び山西省出身）が生産隊の馬車の運転手として配置され、いずれも固定家屋である日干し煉瓦造バイシン^{注8}に居住した。それを真似て、モンゴル族もバイシンを建て始め、1960年になると生産隊全体に普及した。当時、「遊牧よりも定住する方が良い」という政府からの宣伝もあり、バイシンの建設が推奨された^{注9}。バイシン建設に伴い、それまではボルガス *buryas* と呼ばれる低木（ヤナギ科ヤナギ属）の枝を用いていた家畜囲い（ホロー *xori_ya* 又はハシヤ *xasiy_a*）も日干し煉瓦造の固定したものへと変化した。

1966～1976年にかけての文化大革命期には、それまで移動放牧をしながら遠隔地に宿营地を構えていたが、帰郷し、故郷の生産隊に所属することを命じられた世帯もある。

以上のような政策の影響によりホトの構成世帯が増加、固定化すると、分離して新たなホトが姿を現す。1968年、現存する4つのホ

トの前身となる3つのホトが形成された。

ホトAは当初5世帯が集まっていたが、1982年、3世帯が分離し、冬営地として使用していた場所へ移動した（ホトB）。ホトCは現在も存続しており、ホトDは1973年に分離した3世帯が残っている（図4・表1）。

当時、日干し煉瓦造バイシン

も冬用の住居として建築され始めたが、多くの世帯はゲルを所有し、生産隊の家畜を連れて上述のような、オトル^{注10)}と呼ばれる移動放牧をしていた。

図4 ホトの分離模式図

表1 ホトの概要（2009.6時点）

ホトの名称	形成年度	世帯数	家畜数	レンガ造バイシン	インフラ整備年度
A：ホイトスージ xoitu segiiji 意味：スージの北 俗称：北のホト（U家のホト）	1968年	11 すべてモンゴル族 親族関係有	約2000	2	電気 (2005) 水道 (2006)
B：ウルイン ウフルジョー urui yin ebüljij_e 意味：水の多い冬の宿営地	1982年	8 すべてモンゴル族 1世帯を除いて 親族関係有	約2000	3	電気 (2005) 水道 (2006)
C：ジュンスージ Jegün segiiji 意味：スージの東 俗称：東のホト	1968年	7 1世帯のみ漢族 3世帯は親族関係有	2000以上	5	電気 (2005) 水道 (2006)
D：ボンフン アングル bungxun anggir 意味：（山の形） 俗称：南西のホト	1973年	6 1世帯のみ漢族 2世帯ずつ親戚 関係有	約2200	1	電気 (2005)

2-3. ホトの定着化

1982年の冬、人民公社が解体され、畜草双承包と呼ばれる政策が実施される。その内容は、公有の草地の経営及び家畜の管理を世帯や個人が請け負うというものである。その際、土地の所有権が国からホト単位に分配され、その中で世帯や個人が使用权を得るという仕組みとなった。具体的には、ガチャ（生産大隊）の保有していた土地のうち、30%を世帯単位で、70%を個人単位で分配した。1989年には更に細分化した分配が行われ、地図が作成され、土地囲いの柵も建設された。これより、他のホトの敷地には自由に移動することが不可能となり、定着化が一層進んだと言える。この土地分配は、分配時の世帯と個人に対して行われたため、1983年以降に移り住んだ世帯、また第二次分配の1989年以降の出生者には土地が無い。

家畜は、1人につき羊9頭、牛1.2頭^{注11)}、1世帯が5人以下の場合は雄馬1頭、6人以上の場合は雌馬1頭と仔馬、駱駝1頭が分配され、その後、各世帯が家畜を殖やしていった。

U家では人民公社時代から生産隊の馬群をまとめて放牧するアドゥーチン *aduyučin* と呼ばれる仕事に就いており、解体後も4年間は続けた。1996年に土地囲いの柵が増えたこと等から雌馬は手放したものの、最も豊かになった1990年代後半は、羊・山羊500頭、牛52頭、馬を10頭ほど所有していた。

土地と家畜の分配を機に、ホト、または各世帯が季節移動（オトル）することはなくなる。

2-4. 旱魃とホトのインフラ整備

2000年代に入ると、度重なる旱魃により草原の悪化が顕著となっ

てきた。特に2001年の旱魃では大打撃を受け、U家でも雄馬3頭を残して大型の家畜（牛・馬）はすべて売却した。2002年からは中国農村地域で進められている退耕還林政策の一環で、牧畜地域では退牧還草政策が開始された^{注12)}。2003年からはガチャでの施行が開始され、調査地においても春季休牧^{注13)}が実施された。その際、U家は最後の雄馬を売却した。同年、調査地の属するガチャは、自治区の調査団により自治区内1000カ所の貧困ガチャに指定された。そのため、旗から飼料を育てるための畑を建設する指示が出される。水源確保のための井戸を掘る資金のうち、70%を旗の財政局、30%を建設予定地の土地使用权を保有する5世帯（ホトA・B・Cに属する）が負担した。井戸は豊富な良質の地下水を掘り当てることができ、偶然視察に来ていた政府幹部の目に留まった。その幹部の指示で、井戸水を効率的に汲みあげ、有効利用するための電気と水道の敷設が始まる。その結果、全ガチャの14ホトのうち5つを除いて電線が、また共同出資者のいる3つのホトにのみ水道が敷かれた。

現在、4つのホトでは、それぞれ約2,000頭の家畜を保有している^{注14)}（表1）。家畜は各世帯で管理しているが、草刈りや毛刈り等はホト内の世帯が協力して行う。4つのホト間では、以前、家畜を消毒するために洗うという作業を共同で行っていたが、現在は薬をのませるかあるいは注射を使用するため、このような作業は少なくなった。3つのホトは共同で飼料栽培の畑を経営している。4つのホトは、その位置関係より、ホトAを北、ホトCを東、ホトDを南西のホトと呼び、ホトBは以前、冬営地であったためそう呼んでいる。

3. ホトの空間構成と変化

ここでは、ホトAを事例としてその空間構成の変化を把握する。

ホトAは、U家（ホト長）を中心に、夫の父、兄弟などが住む東側部分と、母方の伯父の妻、従兄弟が住む西側部分、計11世帯で構成されている（図5・図6）。1968年にホトが形成されたときには、当初5世帯から成っており、ゲルが図3のように並んでいた。

2009年時点で最年長の住民はU家の夫の父（85歳）で、1972年、現存する最も古い日干し煉瓦造バイシンを建築した（I-a）。当時、後に転居した1世帯もバイシンを所有しており、ホトにはバイシンとゲルが混在していた。U家の夫は5人兄弟の長男で1975年に結婚するまで家族6人がこのバイシンとゲルで暮らしており、結婚後も同居していたが、1982年に独立して新しいバイシンを建築する（II-a）。1982年は人民公社解体に伴い家畜が分配されたため、ホト内の日干し煉瓦造畜舎が一斉に建てられた年でもある。バイシンや畜舎は、基本的に当時ゲルを建てていた場所に配置した。そのため、畜舎の北側（北西）に畜舎を囲むようにしてバイシンが建てられている。

1990年代に入ると、結婚による世帯の独立が相次ぎ、バイシンも増加する。1992年にホトでは初めて煉瓦造のバイシン^{注15)}（VI-a, VI-b）が建築された。このバイシンはホトの北西に位置するが、南側には既に土地が無いため、畜舎を北側に配している。

1996年頃には、畜舎のまわりの柵が常時設置されるようになる。これは、ホトのバイシンや畜舎の増加、また家畜の増加が一因となっている。2-1で述べた宿営地の形態と同様に、冬は家畜を集めて柵の中に入れておき、夏は比較的広いスペースに放しておく。しかし、ホトが固定化し、密集してくると、各世帯の家畜が混ざってし

図6 ホトA配置図

まう。また、燃料用に積んでいるアルガルを牛が倒す等の問題が生じた。そこで、夏にも柵で各世帯の家畜を明確に区分し、またアルガルを守る方策がとられた。

2000年に入ると、既存のバイシンと新築のバイシンを組み合わせ、あるいは改築して二世帯住居にする傾向がみられる（I-b、II-b）。また、春季休牧に伴い畜舎の増設が行われた。

ホトの敷地（約858ha）のうち、放牧地は1989年時点での人口に応じて使用権が分配されているが、世帯ごとの境界は明確にしておらず共同で利用している。東側5世帯と、西側6世帯が使用する範囲は、ゆるやかに分けているが、可視的な境界は設けていない。

一方、住居と畜舎の建つ居住部分（約3ha）については、個別の使用権はなく、ホトに属する共有地となっている。しかし、各世帯の住居及び畜舎の敷地、柵の内部などは事実上、私有化されており、ホト内の可視的な敷地境界であるといえる。また、ホトの南東約140mに共同で使用している井戸があり、家畜放牧の動線を塞がないようにバイシンや畜舎を配置している。しかし、東側5世帯と西側6世帯の間は、南北（北西から南東）方向に壁面が連なり、通り抜けできる空間が少ない。実際に、人が行き来することはあるが、家畜を横切らせることは殆ど無い。2つの家系の区域分けを読み取ることができる。

4. 住居の変化

1970年代から2000年代の約40年の間、各年代に建築された住居が集まっているホトAにおいて、住居の変化を整理、分析する。

4-1. 平面構成の特徴

ホトAのバイシンについて、居住部分の平面構成を整理すると、II-b(7室)を除いて、3室または4室の構成であることが分かる（図7・9）。更に2室の別棟を配している事例もある。以下、事例を元に、各構成の特徴を述べる。

1) 3室構成

入口のある中央をガダングル *γadaγ_a ger*（外の部屋）、奥から入口に向かって右側がバルングル *barayun ger*（西/右の部屋）、左側がジュングル *jegün ger*（東/左の部屋）と呼び、3室が横に並列している。ガダングルにはジューフ *juux_a*（炉）があり、厨房機能を持ち、バルングル、ジュングルにはモンゴル語でハンジ *xanju*、漢語で炕 *kàng* と呼ばれるオンドル式のベッドが設置されることが多い。

I-aとII-aが3室構成である。現在、I-aは2室となっており、ガダングルから東へ入ったかつてのジュングルをドットルグル *dotor ger*（内の部屋）と呼んでいる。聞き取りにより、以前の室構成を模式図として再現すると、図8のようになる。建築当時は3室構成で、1975年の長男（U）結婚時、バルングルの西側に1室増築す

図7 ホトAの住居平面図と概要 (I-a~II-b)

図8 新築時の室構成

る。また、文化大革命の中、主人 (U の父) の姉家族が嫁ぎ先から帰郷し、その際、ジューンゲルの東側に部屋を増築した。その後、長男UはII-aを、姉はIVを新築して独立し、二男・四男がホトを離れ、三男は1990年に独立 (VII) した。末子である五男が2000年にI-bを新築する際、西側部分を減らして、現在の構成となった。

II-aも新築当初は3室構成であり、その後、ジューンゲルの東側

に夏用のトゴンゲル *toyog_a ger* (厨房) を増築、1989年には、西側部分 (倉庫、車庫、現・夏の厨房: 当時は雇っていた牧夫の部屋) を増築した。2001年、U家の長男結婚を機にII-bを新築し、その際、東側のトゴンゲルをなくし、ジューンゲルを車庫とした (図7)。

2) 4室構成

ホト成立初期に建てられたI-a及びII-a以降、4室構成の平面が主流となる。4室が田の字型に並んでいるのが特徴的で、入口のあるガダンゲル、その横をドトルゲル、北側の奥の部屋はアリン

ゲル *aru yin ger* (奥の部屋) と呼ぶこともあるが、トゴンゲルやオンタフゲル *untaxu ger* / ホノホゲル *xonoxu ger* (寝室) といった部屋の用途に対応した名前と呼んでいる。一部物置部屋やシャワー室を新たに設置しているものもある (II-b, III-a, VI-b)。二世帯住居 (III-a・III-bやVI-a・VI-b) でも、一世帯ごとにみると4室構成である。

3) 7室構成

ホトAのバイシンはすべて、現在ホトDに居住する河北省出身の漢族によって建てられていたが、II-bでは初めて旗の都市部の大工 (漢族: 出身地不明) に頼んで建築した。ガダンゲルを居間・客間として広くとり、子ども部屋や書斎など機能を細分化させた部屋を配置している。トゴンゲルの炉は暖房用で、調理や食事はすべてII-aのガダンゲルを両親と共用している。

4) 別棟の設置

別棟は2室構成で、いずれも入口のあるガダンゲルは夏の厨房、ドトルゲルは倉庫となっている。VI-a, VI-bでは世帯ごとに別棟を東側 (VI-a') 及び西側 (VI-b') に配している。VIIでは、西側に配して (VII') 間を繋ぎ、車庫にしている。夏用の厨房を設ける理由として、夏に室内で炉を使用すると、炉の煙突が暖房を兼ねてしまい部屋の温度が上昇することが挙げられる。ゲルを使用していた頃には、夏になると骨組の外側に被せているフェルトをめくり上げ、

図9 ホトAの住居平面図と概要(Ⅲ-a~Ⅷ)

風を通すなどの対応ができた。あるいは、裕福で複数のゲルを所有している場合、1つを居住用、1つを厨房又は倉庫専用に使用することもあった。別棟の設置は室機能の分化であると同時に、遊牧時代の季節に応じた住み方や習慣を固定した家屋において実現するものでもある。

4-2. バイシン平面構成にみる伝統的空間概念

伝統的なゲルでは、入口を南あるいは南東に向け、入口に向かって右（西）側が上位（男性や客人の場）、左（東）側が下位（女性や子どもの場）で、中央に炉を配し、その奥（北）側が宗教的な祭壇を置く場である。左右ともに奥へ進むに従って上位になり、祭壇の前には家長とその妻、あるいは目上の客人等が着座する¹⁷⁾¹⁸⁾。この空間概念が本稿の事例でどのように反映されているか分析する。

バイシンにおける上位・下位空間及び動線を模式化すると、図10のようになる。以下、各室構成ごとにその特徴を述べる。

1) 3室構成の空間概念

伝統的空間概念が最も強く反映されているのは、建築当初のⅡ-aの室構成である（図8）。入口のガダンゲルには炉があり、その奥のハンジには夫妻、バルンゲルには長男、ジュンゲルには長女～三女が就寝していた。また、厨房（女性の場合）が東側に増築されている。部屋を改築する際（Ⅱ-b新築時）にもバルンゲルを残しジュンゲルを削って車庫にしており、またバルンゲルには祭壇も置かれていることから、現在でも西の優位が確認できる。

一方、Ⅰ-aでは現在、家長であるUの父がジュンゲル（現・ドットルゲル）のハンジを定位置とし、北側のアブダル（長もち）上には祭壇も置かれている。よって、ジュンゲルが上位空間となっており、西を上位とする方位概念とは反転する。これは本来本家であるはずのⅠ-aよりも西側（ホトの中心部）へ向かうかたちで息子たちの独立や増改築を繰り返していることが理由として挙げられる。ホトが定着化するなかで、実質的にホトを管理しているのは息子家族（特に長男家族のU家）であり、そこへ権限を委ね、自らは住み慣れた暖かいハンジのある部屋を定位置とした。伝統的な方位概念ではなく、ホトの長老でもある家長のいる部屋が、結果的に上位空間として認識されている事例である。

2) 4室構成の空間概念

4室構成をみると、ガダンゲルが西に位置するものと、東に位置するものがあり、またトゴンゲルとオンタフゲルの位置も一定ではない。しかし、動線に着目すると、ガダンゲルに接する部屋にはそれぞれ動線がつながっているが、ドットルゲルと北側の部屋の間には開口部がなく、行き来ができない。ドットルゲルの用途をみると、夫妻の主寝室、もしくは祭壇や写真などが置かれることが多く、上位空間となる傾向がある。一方、ガダンゲルを挟んで逆側にはトゴンゲルや倉庫などが配され、比較的下位空間となっている。この上位空間と下位空間は直接繋がることのないのである。上位とする部屋の位置については、西の優位性を実証できないが、入口（ガダンゲル）から左右に分かれ、階級の異なる空間を配することは、ゲルから3室構成バイシンに至ってみられる伝統的空間構成に通じる特徴であると考えられる。

3) 7室構成の空間概念

Ⅱ-bの室構成では、3室・4室でみられたような空間概念を読み取ることはできない。ただし、最も面積の広いガダンゲルをジョチ

図10 バイシンの平面構成模式図

ンゲル *jočin u ger*（客間）と呼び上位に位置づけており、入口からみて奥の壁には、チンギスハンの彫刻を施し、ハタグ *xaday* と呼ばれる祭事や儀式に用いる布が飾られている。ソファの位置も西側で、客人などを招いた際には、奥と西側を上座とし、家族は入口付近の東側に仮設のイスを置いて対応する。客間の中ではゲルの伝統的な空間概念を意識しているといえる。

4-3. インフラ整備や都市部住居の影響

1) 暖房設備の変化

3室構成バイシンではハンジが主な暖房であった。現在は、ハンジに加え、炉（ジューフ）の煙突が部屋を横切るようにして暖める煙筒（イェントン *yāntong*）が主流である。調理の際、夏は室内あるいは別棟にあるトゴンゲルを使用し、冬にはハンジにつながる炉や家族が集まるガダンゲルの炉を使用する等の工夫がみられる。2000年代に入ると、漢語で暖気（ノアンチー *nuǎnqì*）と呼ばれるラジエーター^{注16)}も導入されている（Ⅱ-b, Ⅲ-a）。

2) ガダンゲルの用途変化

3室構成バイシンでは、ガダンゲルは炉のある厨房としての機能をもっていた。4室構成では、トゴンゲルとして厨房を独立させて、ガダンゲルは居間・客間として利用される傾向がある。多くの事例で食事室にもなっている。冬には暖房の効率性から、ガダンゲルの炉で調理をするケースもある。しかし、Ⅱ-bやⅢ-bの場合、暖気を導入していることもあり、ガダンゲルの厨房機能は消滅している。

3) 建築材の変化

ホトのバイシンはいずれも組積造で、壁材は、Ⅱ-a・Ⅳ-a・Ⅳ-bの煉瓦造を除くとすべて日干し煉瓦造であるが、1990年代からは正面の壁表面は煉瓦にするといった傾向もみられる。屋根は切妻屋根で、棟木と母屋には、ハルモド *xar a modo* と呼ばれるマツ材（マツ科カラマツ属）を使用し、ウリヤス *uliyasu* と呼ばれるヤマナラシ材（ヤナギ科ハコヤナギ属）の垂木をかけ、ボルガス（柳）を編んだものを挟んでその上に土を固めていた。しかし、ボルガスが入手困難となり、近年ではデルス *deresi* と呼ばれる草（イネ科ハネガヤ属）を編んだものを使用するようになった。また、Ⅰ-a以外は、現在、煉瓦の瓦葺き屋根である。窓は木製の枠にガラスが用いられていたが、Ⅰ-a, Ⅱ-a以外には鉄製の枠が使用されている。扉は木製で、

玄関口には外側の面に鉄製の板が使用されることもある。床材はモルタルや煉瓦が用いられていたが、近年はタイル敷きが普及している。日干し煉瓦に使用する良質の土が減り入手困難になっていることから、今後は、新たな材の導入が予想される^{注17)}。

4) 庭の設置

パイシンの入口前面に、塀を設置し、庭（ホロー）をもつ世帯がある（Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅶ）。定着化に伴いホト内の建築物が密集すると、家畜を放牧する際、また畜舎に戻す際の動線がパイシンのすぐ前を横切るようになった。家畜がパイシンの中へ入ってくることもあり、また家畜の糞は特に夏季になると雨で汚れてしまうため、それを防ぐために塀を設置し始めた。また、旗の都市中心部などで普及している庭付きの平屋を真似たという理由もある。庭では洗濯やチーズ作りなどの作業を行う。現在ほどの世帯でもみられないが、Ⅱ家では今後、都市部の世帯を真似て、庭内に家庭菜園をつくることも計画している。

5. おわりに

5-1. まとめ

調査地の社会変化、牧畜業の変化、ホトの空間変化、居住形態の変化の関係を図11のようにまとめ、その特徴を以下に記述する。

1) 牧畜業を効率よく営むため、相互扶助や草原の共同維持という目的で臨機応変に発生していたホトであるが、1958年の人民公社設立を境に、ホトは移動放牧の際の宿营地集団という機能から、行政が執行される一つの組織としての機能が強まる。政策による人口の固定化と増加が、集住というかたちでの牧畜業の出現につながったと考えられる。

2) 1982年から始まった家畜と土地の分配により、ホトの定着化は決定的となり、それまで、パイシンと併用していたゲルも一気に姿を消すことになる。また、土地の所有権が国からホトに移り、ホトの機能がより固定的になったと言える。元来、土地面積が狭く家畜も少ない調査地において、分配された土地と家畜を効率的に経営するため、ホト単位での集住と土地の共同利用という牧畜業の形態が確立されたと考えられる。

3) ホトの空間構成は、伝統的な宿营地の配置を基本としつつも、世帯の増加に伴ってパイシンや畜舎の密集が顕著になっている。また、本来、ホトの共有地としている居住部分にも、柵や塀の設置によって事実上、私有地化する空間が増加している。但しこれは、土地の使用権を主張するというよりも、定着化生活のなかで、各世帯の家畜や家畜の糞といった私有財産を明確に区分するための方策といった意識の方が強い。休牧政策等の影響もあるが、敷地境界の可視化傾向は、定着化が進んでいることを示すものである。これは、調査地の全ホトに共通して確認できる現象である。

4) 住居の平面構成は、初期の3室構成パイシンから、1980年代、ゲルの消滅とともに、4室構成のパイシンが主流となる。ここまでは、伝統的なゲルの空間概念を引き継いでいると考えられる特徴がみられる。しかし、上位とする部屋の位置やガダンゲルの用途、庭の設置などに定着化以降の空間概念変化が確認できる。更に室数が増えると、機能が分化し、部屋の用途には各世帯の家族構成や嗜好等が反映される余地が増えるため、伝統的な空間概念が室構成に及ぼす影響は減少することが予想できる。

また、2000年代のインフラ整備によって、ラジエーターの導入や新たな建築材等の普及が進むと、更に各部屋の機能が変化することも予想できる。

調査地の4ホトでは大半のパイシンが同じ漢族の影響を受けているため、平面構成にも大差がないが、他地域の大工によるパイシンの導入も各ホトでみられ、現在、伝統的な空間概念と、都市部住居などにも影響を受けた定着化による新たな空間概念が混在する過渡的な状況であるといえる。

5-2. 今後の課題

今後、更に調査事例を増やし、牧畜形態やホト全体の配置及び空間構成の特徴、パイシンの室構成分類や空間概念の変容などについて、ホトの世帯構成（漢族との混住、親戚関係の有無）などによる違い、大工である漢族の空間概念にも着目し、分析を深める必要がある。また他地域との比較を加えることで、ホトという集住型の牧畜業と居住形態の特徴を把握することを今後の研究課題とする。

図11 社会変容と牧畜業・居住形態変遷の関係年表

本研究は平成 18 ～ 21 (2006 ～ 2009) 年度科学研究費補助金 (基盤研究 A, 代表 : 今井範子, 課題名「中国内モンゴル自治区におけるモンゴル民族の生活様態と居住空間に関する総合的研究」) による研究成果の一部である。

謝辞

本調査では、現地コーディネーター及び調査家庭の皆様には複数回に渡る訪問と調査を快く歓迎して頂いた。パイシンの平面構成分析に際しては、奈良女子大学生生活環境学部山本直彦准教授にも御助言を頂いている。ここに記し、感謝の意を表したい。

参考文献

- 1) Caroline Humphrey and David Sneath : The End of Nomadism?, Duke University Press, 1999
- 2) 小長谷有紀 : 中国内モンゴル自治区におけるモンゴル族の季節移動の変遷 — 錫林浩特市域の事例から, 塚田誠之編 : 中国における諸民族の移動と文化の動態, 風響社, pp. 69-106, 2003
- 3) 山根周 : 現代モンゴルの住空間, 滋賀県立大学人間文化学部研究報告 3 号, pp. 70-83, 1997
- 4) 梅棹忠夫 : モンゴル研究, 中央公論社, 1990
- 5) 小長谷有紀 : モンゴルの春, 河出書房新社, 1991
- 6) 小長谷有紀 : モンゴル草原の生活世界, 朝日新聞社, 1996
- 7) 包慕萍 : モンゴルにおける都市建築史研究—遊牧と定住の重層都市フフホト, 東方書店, 2005
- 8) アラ騰 : 文化的变化— 一个嘎查的故事, 民族出版社, 2006
- 9) 阿部治平 : 内モンゴルにおける牧畜家族経営の成立過程, 中国研究月報, pp. 1-8, 1988
- 10) ボルジギン・ブレンサイン : 近現代におけるモンゴル人農業集落社会の形成, 風間書房, 2003
- 11) リンチン : 1950 年代の内モンゴルにおける民族政策 : 土地改革, 協同組合化, 言語問題, 言語・地域文化研究 11, pp. 183-205, 2005
- 12) 児玉香菜子 : 中国内モンゴル自治区オルドス地域ウーシン旗における自然環境と社会環境変動の 50 年, 地球環境 10-1, pp. 71-80, 2005
- 13) 小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編 : 中国の環境政策 生態移民, 昭和堂, 2005
- 14) ソーハン・ゲレルト : 過放牧発生の社会的背景—イミン・ソムを事例に一, 沙漠研究 11-1, pp. 23-34, 2001
- 15) 镶黄旗志编纂委员会編 : 镶黄旗志, 内蒙古人民出版社, 1999
- 16) 利光有紀 : “オトル” ノート—モンゴルの移動牧畜をめぐる一, 人文地理, 第 35 巻第 6 号, pp. 68-79, 1983
- 17) INAX ギャラリー企画委員会編 : 遊牧民の建築術 ゲルのコスモロジー, INAX BOOKLET, 1993
- 18) 海日汗 : モンゴル族住居の空間構成概念に関する研究—内モンゴル東北地域モンゴル族土造家屋を事例として—, 日本建築学会計画系論文集, 第 579 号, pp. 179-186, 2004. 5

注

- 注 1) *xota* は、内モンゴル自治区で使用されているモンゴル文字を転写したもので、転写に際しては「内蒙古大学蒙古学研究所編 : 蒙汉词典 (増訂本), 内蒙古大学出版社, 1999」の表記を用いた。以下、本文中のモンゴル語については、同様に転写する。一方、英文タイトル及び要旨においては、ホトを “hot” と表記している。英文については、参考文献 1) など既往論文にて一般的に用いられている表記を採用した。また、漢語についてはピンイン (拼音) を表記する。
- 注 2) 宿营地集団は一般的にホト・アイルと呼ぶが、地域によってホトのみで宿营地集団を表わす。また、ホトは都市という意味でも用いられており、フフホト (内モンゴル自治区の行政公署所在地) やシリンホト (シリングル盟の行政公署所在地) といった大都市の名前にもなっている。
- 注 3) 参考文献 1 ～ 6) 等
- 注 4) 盟 *méng* : 内モンゴル自治区の行政単位でモンゴル語ではアイマグ *aimag* と呼ぶ。地区、市 (盟級市) と同レベルである。旗 *qí* : モンゴル語でホシ

ョー *xosiyu* と呼び、盟の下位行政で、県、市 (旗・県級市) と同レベルである。鎮 *zhèn* : モンゴル語でバラガスと呼ぶ。旗の下位単位で、牧畜地域ではソム *sumu* ・郷と同レベルである。ソムは 1950 ～ 80 年代は人民公社と呼ばれていた。ガチャ *γačay a* : ソム・鎮の下位行政で村に相当する。人民公社時代には生産大隊と呼ばれていた。

- 注 5) 聞き取りはすべてモンゴル語で、詳細が不明な場合は漢語も併用している。第二次調査のみモンゴル語⇔日本語の通訳をいれている。ホト配置図は歩測とレーザー測量器を併用し、おおまかな配置を描き、寸法を与えて補正している。
- 注 6) 1958 年より「一大二公」(一に大規模化、二に生産手段のよりいっそうの社会主義集団公有化) と「政社合一」(行政と経済活動を共に行う) を実施する「人民公社」化運動が促進された。人民公社 (ソム) は複数の生産大隊 (ガチャ) から成る。
- 注 7) 生産大隊は複数の生産小隊から成り、ホトはこの生産小隊に組み込まれた。
- 注 8) モンゴル語ではシャバル *sibar* (泥) パイシンと呼ぶ。日干し煉瓦は、漢語で土坯 (*tǔpī*) で、調査地ではこの漢語をモンゴル語に取り入れデーフィーと呼ぶ。
- 注 9) 1956 年、中国共産党と人民政府は自然地理環境や利用可能な草原面積、人口密度の状況に基づいて、牧畜民の定住を推奨する声明を出した。1966 年までの 10 年間に、镶黄旗では、3000 戸以上の牧畜民が定住し、畜舎や井戸なども整備された¹⁵⁾。
- 注 10) オトル (*otor*) : 従来は馬群キャンプを示す言葉として知られていたが、現在に至っては、宿营地から家畜群を切り離す放牧という意味が認められる¹⁶⁾。秋に家畜を太らせるために行うことが多いが、季節は問わない。天災被害から家畜を守るという側面もある。調査地では宿营地の固定化が進み、世帯の一部が家畜を連れて放牧する形態が一般的となり、これもオトルと呼んでいる。
- 注 11) 分配当時のガチャ全体の家畜数を人口で単純に割るという計算上、端数がでたもの。端数は、0.5 未満を切り捨て、0.5 以上で 1 頭と数えられた。(例 : 家族 2 人 = 計算上 2.4 頭 = 実際の分配 2 頭, 家族 3 人 = 計算上 3.6 頭 = 実際の分配 4 頭)
- 注 12) 中国全土で深刻な問題となっている沙漠化等の環境悪化、及び貧困問題への対策として打ち出されたもので、2000 年から農村地域で段階的に実施されている。土地を耕すことをやめ、その土地を森林 (草地) に戻すことを目的とし、各家庭による植林が推奨されている。牧畜地域では、2003 年より、家畜を放牧することをやめて、牧草地を草原に戻すことが推奨され、これに伴い、「禁牧」「休牧」「区画輪牧」といった政策が実施された¹³⁾。
- 注 13) 牧草が萌芽から結実するまでの期間内において放牧を禁止すること¹³⁾。
- 注 14) 家畜の種類と割合は 4 つのホトで概ね同様となっている。ホト A では、牛が約 150 ～ 160 頭、羊が約 850 頭、山羊が約 1000 頭である。駱駝はおらず、馬も 2003 年に U 家が手放した 3 頭を最後に、どのホトでも保有していない。
- 注 15) モンゴル語ではトースン *toyosx n* パイシンと呼ぶ。
- 注 16) 温水や蒸気を循環させて放熱する暖房機器。調査地では、炉で石炭を燃やし、鋳鉄製のパイプに温水を循環させて暖める。
- 注 17) 調査地では、壁材として日干し煉瓦に代わって煉瓦の使用が増えていくが、耕地保護や生産に関わるエネルギー消費の抑制、保温断熱性能の問題等の理由により、都市部では粘土煉瓦の使用が禁止される法令が發布されている。フフホト市建設委員会によると、内モンゴル自治区では、2008 年末までに、シリンホト市 (シリングル盟の行政公署所在地) を含む 8 つの都市で使用禁止となり、2010 年末までには、全都市区域での禁止が決定している。調査地のような牧畜区域には現時点で煉瓦の使用禁止について具体的な通知を確認することができなかったが、今後、都市部の影響を受けることが考えられる。

(2009 年 9 月 10 日原稿受理, 2010 年 1 月 18 日採用決定)